

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	島村 幸忠
論文題目	近世後期の文人と煎茶 ——頼山陽およびその諸芸術に関する考察を中心として——		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、江戸時代の後期、特に文化文政期を中心に活躍した文人・頼山陽(安永9〔1781〕年～天保3〔1832〕年)における煎茶の意義について考察するものである。その際、山陽が制作した漢詩や漢文、あるいは書画や建築などといった芸術作品のなかでも、特に煎茶に関するものを取りあげて、考察を進めてゆく。それゆえ本論文は、おのずと山陽の芸術論の様相も呈するようになる。</p> <p>日本の煎茶文化に関する研究は、いわゆる茶道、あるいは茶の湯に関する研究に比べて、その歴史の浅さを考慮したとしても、圧倒的に蓄積を持たない。特に、化政期から幕末にかけて活躍した文人に関する研究が進められてこなかった。本論文は、そのような研究の不備を補うものである。以下では、各章で論じた内容をまとめるとともに、一連の議論を通じて明らかとなったことを簡潔に示す。</p> <p>第一章「山陽の茶の湯批判再考」では、山陽による茶の湯批判について再考した。その際、本章では「煎茶歌」(文政6〔1823〕年)の読解を主に行った。その結果、山陽の茶の湯批判は、修史のなかで培った、耽溺、奢侈、過剰なしきたりに対する批判的な精神と並行関係にあることが理解された。</p> <p>第二章「『桐陰茶寮記』にみる山陽の煎茶観」では「桐陰茶寮記」(文政6年)を中心に取りあげた。本章ではまず、依頼者である小野桐陰および、その成立過程を跡づけた。山陽によれば、煎茶の意義は「物外に心を遊ばす」こと、すなわち、決して茶事に耽溺するのではなく、忙しい日々の隙間をみつめて、限られた時のなかで楽しむ、というものであった。</p> <p>第三章「漢詩にみる煎茶」では、山陽の茶に関する漢詩にしばしば登場する「茶声」に注目した。茶声とは、湯を沸かせる、あるいは茶を煎じるときに生じる音である。山陽は、幽玄な空間で聴くことのできる茶声を特に好んでおり、琴や笙の音色に、あるいは蟬の鳴き声に喩えて、漢詩に詠んでいた。</p> <p>第四章「煎茶を介した交遊」では、山陽と田能村竹田(安永6〔1777〕年～天保6〔1835〕年)、そして雲華上人(安永2〔1773〕年～嘉永3〔1850〕年)とのあいだで交わされた交遊において、煎茶がいかに嗜まれていたのか、彼らの残した漢詩文を取りあげることによって詳らかにすることを試みた。多くの場合、煎茶は酒と対のものとして登場するということが明らかとなったが、その行為は、中国の文人の詩的世界の実現に向けられたものであったことを指摘した。</p> <p>第五章「煎茶室としての山紫水明処」では、山陽の煎茶室「山紫水明処」について再考した。茶の湯の茶室と異なり、煎茶室は眺望にその最大の特徴が認められるので、本</p>			

章では、山紫水明処から望むことのできる東山連峰と鴨川の風景に重点をおいて論じた。その眺望は、山陽の目には、近世後期文人にしばしばみられた山水画的な風景としてのみならず、その他の近世人によくみられた行楽の地、さらには、幾多もの歴史的出来事が起こった場、の三つが重なり合ったものとして映っている、ということを描いた。

第六章「化政期の文人と煎茶」では、以上までに行ってきた議論を踏まえ、山陽を相対化するために、竹田と青木木米の煎茶観について考察した。ここでは、特に、竹田の芸術論の要をなす「自娛」という概念に着目した。その上で、竹田における煎茶とは、自ら楽しむことを基本として、俗気を払い、養生へとつながるものであり、他の芸術活動と並行関係にあるものとして語られる行為であったということを描いた。

最後の第七章「山水図および題画詩にみる煎茶」では、前章で論じた竹田と山陽の芸術に対する考え方の差異をより明確なものとするため、山陽の作画精神について論じた。本章では、「磊砢」という術語を中心に解釈していくことで、山陽の画作品には、彼の歩んだ人生や国家の情勢を憂う心もあわせて表現されているということを示した。

以上の通り、本論文では、まず、山陽の茶の湯批判についての考察から出発し、それと対照的に語られる煎茶の意義の明確化を試みた。その際、山陽が残した芸術作品の分析へと向かった。それは勿論、上田秋成の『清風瑣言』や『茶痕醉言』、あるいは田能村竹田の『泡茶新書三種』などのような煎茶書を山陽が残していないということにもよる。その結果、山陽の漢詩や画作品の特徴をも、部分的にはあれ明らかにすることができた。特に本論文では、煎茶も含めて、山陽の諸芸術に対する、歴史／政治思想の影響を強調した。それは、これまでの山陽研究において、詠史詩の研究を除いて、両者が結びつけられて考えられる機会がそれほど多くなかったからである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は『日本外史』などで知られる江戸後期の儒学者、頼山陽における煎茶趣味を考察するものである。文化文政期には、煎茶趣味を持つ多くの文人が各地に存在していた。文人文化の花開いた化政期は煎茶文化にも多くのものをもたらした。この時代の文人たちに関する研究が重要であるのは、彼らの時代の煎茶文化を解明するという意味においてだけではない。というのも、化政期の後、すなわち幕末から明治にかけて、日本の煎茶文化はさらなる隆盛へとむかうことになるが、その流れを作ったものこそ、ほかならぬ化政期の文人たちであったからである。このように、煎茶文化の研究にとってこの時期の文人たちの重要性はいくら強調してもしすぎることはないほどであるにもかかわらず、彼らについての研究はこれまでほとんど進んでこなかった。

本論文はこうした研究状況を踏まえ、まず山陽を足がかりとしてこの時代の文人と煎茶のかかわりを解明しようとする。あまたいる化政期の文人のなかで山陽に注目するのは、彼がこの時代を代表する文人であり、また煎茶文化の代表的な担い手でもあったからである。もちろん、その影響は山陽が生きた時代に限られるものではない。幕末以降、煎茶の宗匠が出現し、全国各地に煎茶道が創流された後、現在にいたるまで山陽はその道で尊敬され続けている。

山陽は、歴史書を中心にさまざまな著作を執筆するかたわら、数多くの芸術作品(詩文書画)を制作した。それら彼が残した作品や書簡のなかには、年代にかかわらず、煎茶にまつわるものが少なからず含まれている。しかしながらこのうち、先行研究がこれまで参照してきたのは、煎茶を茶の湯と対比させ、前者の優位を説いた書簡などの限られた史料のみであり、その結果、山陽の茶の湯批判ばかりが注目されてきた。またその際、証左となる史料の紹介が行われているのみで、茶の湯批判のもつ意味について、またさらには山陽における煎茶の意義にまで踏み込んで論じられていない。それゆえ、煎茶史における山陽の立ち位置も曖昧なままであった。

続紙1でも述べたように、そもそも日本の煎茶文化に関する研究は、茶道に関する研究と比べて圧倒的に蓄積が少なく、また、なされてきた研究の多くも、その歴史の概略をたどったもので、それぞれの煎茶家を詳しく扱ったものはそれほど多くない。確かに、高遊外壳茶翁や上田秋成について論じたものは少なくないし、また、明治期以降の茗讌図録に関する研究も進められつつある。一方、文人文化が円熟をみた文化文政期から幕末にかけて活躍した文人に関する研究は、田能村竹田などごく一部の文人を除き、ほとんど進められてこなかった。とりわけ、山陽に特化して論じたものはいまだになく、本論文はこの欠を補うという点において、頼山陽研究のみならず煎茶文化研究にとっても重要な意味をもつ。これらの研究が有意義なものであるのは、ときに概説的な研究において一括りにして論じられてきた化政期の文人のそれぞれが有する個性を明らかにすることにつながるためである。

本論文の特徴として、詩文を中心とした山陽自身の言葉をもとにしてその煎茶観を

詳らかにするのはもちろんのこと、さらに彼の交友関係、自宅の煎茶室の機能、友人の煎茶観との対比、その作画精神の特質といった多面的な角度からこれに光を当て、立体的に浮かび上がらせようとする姿勢が挙げられる。このように幅広いアプローチを採用したことによって、山陽における煎茶の意義の多様性・複合性が把握できるようになった。一方で、論点が多岐にわたるぶん、各章にはなお議論を深める余地が見られないわけではない。たとえば、その茶の湯批判が政治思想と結びつくという第一章の主張はもう少し丁寧に論証されるべきであるし、第二章や第四章で言及される中国文人の仙界志向と山陽の現世志向というコントラストについても、さまざまな観点からあとづける必要があるだろう。第七章の「磊砢」の解釈も、議論として理解はできるものの、さらに説得力を高めるために全体的な記述の厚みを増すことが望まれる。また、ヴァリエティに富んでいるがゆえにいつそう、各章の有機的な連関には周到な配慮が求められるだろう。これらは、著者の今後の研究活動も含めて、解決すべき課題として残りはするものの、しかしながらその総体的な成果を考慮するならば、本論文にとって決定的な瑕疵とまではいえないものである。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和3年2月6日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降